宗像
毎月一日発行
発行所　宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊26番
定価一年送料共500円

夏季大祭斎行

―夏越祭に引続き―

八月一日と二日、恒例の夏祭がとり行われた。

これに先立って前日の七月三十一日夕刻、夏越祓が行われ、附近の氏子も参集の上、茅の輪を潜って身を清めた。同夜は社頭の広場に於て神賑行事の映画会を催した。夕涼みがてら集った数百人の人々が「キングコングとゴジラ」を楽しんだ。

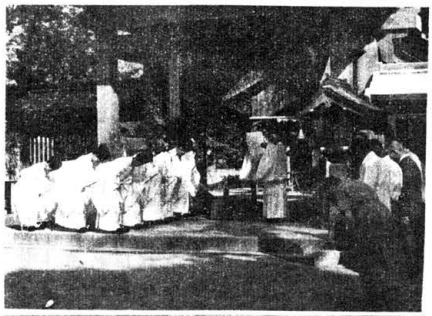
翌八月一日早前八時、本殿祭に先立ち高宮祭を斎行した。うっそうと茂った高宮の境内には降るような蝉しぐれ。それがかえって静寂さを強調するかのようであった。祭員四名による警蹕斎場の祭儀は荘重な雰囲気のうちに終了した。

小砂利の石原に拝座した参列者の肩を一陣の涼風が過ぎた。

午前十時、辺津宮本殿祭斎行。この時刻頃、交通安全祈願祭を申込むために自動車が殺到した。丁度この日が夏季大祭であるのと八月一日、更に日曜日と三重に重ったため、社前は自動車で一杯になった。祭典中も参拝者の拍手の音がひっきりなしに続いていた。社殿を装飾した御幣や御簾が揺れるほどの快い風が吹いて、第二日祭は無事終了した。

第二日祭も前日同様の好天に恵まれて滞りなく終了。

これで夏の儀りの一時期を一つ無事に通過した訳である。此の地方はこれから本格的な暑さとなり稲や作物の出来不出来がこの時期の天候に左右される。やがてお盆、それに続いて秋彼岸、そして年に一度の田島放生会が来る。それ迄は暫くの間農閑期になる。


夏越祭

七夕踊

その間に、九月一日には風鎮祭（かぜしずめのまつり）を行って台風などの災害を蒙らない様に、特に神恩の加護をお祈りする。

神社の祭典は昔から地域社会の人々の生活と直結して来た。まつりが氏子のノスタルジャとなっていることは、昔も今も変らない。しかし新時代は新しい世相を示し、人々の心も亦変化して来つつあることも確かである。

恒例の祭はいつの世にも変らない。移りゆく世の中にあって、祭だけはお社の存在と共に変らない。但し、奉仕する神職の心構えとしては新時代の人心をいかにつかみ、いかにして御神徳を氏子に光被せしめるかを思わねばなるまい。

夏祭を終って、考えさせられることの多いのを覚える。

宗像大社御用達
祭具、装束
結婚式場用品
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
八六九番
電話（37）九三七二番
振替口座京都一五八九一番

論説　ころんだ後の杖

目に入るものは、波と雲ばかり。ここは鳥も通わぬ玄界灘と、歌に唄われた絶海の孤島沖ノ島。連日波浪に洗われる巌頭に、酷熱の陽光を浴びながら、六十年前、この島の直前で、西宗像沖ツ宮の神前で、祖国の運命を賭して戦われた日本海々戦を偲び、今次の敗戦後の現状を静かに考えてみる。

八月十五日、悲しくも日本降伏の日と世界歴史は誌す。太平洋戦争終結の忘れもない日を迎えて、同行の若い職員と沖ツ宮の祭儀を執り行い、断崖を降って社務所での懇いの一時を語り合った。我が国の歴史とその核心を流れるものは、太平洋戦争に際会して、日本人の心の中に脈々と流れる民族の血潮であり、伝統であり、信念であることを痛感した。

太平洋戦争の悲劇的終結と、その後の国民の反祖国的風潮、南北ベトナムの戦斗や、沖縄住民の苦悩などを。

六十年前、祖国の近海に侵航するバルチック艦隊を迎えて、皇国の興廃を賭けた乾坤一擲の大海戦に敢斗した東郷元帥麾下の連合艦隊はもとより、その背後にある、勝利の日が滅亡の第一歩と踏み出す日となりましょう。」と。戦はまけねばならぬ。理窟はとも角、勝つことが先決だ。と当時考えていたが、この言葉を噛みしめるとき、無法の剣は遂に己を傷つけて、終るものだと思わねばならなかった。日本の精神に反する私が凱歌をおさめてはならない。

荒廃の国土に、ユニオンジャックが翻り、日の丸が影をひそめた時、中国史の所謂「城下の誓い」を文字通りに痛感した。同胞若しくは互礫の街を飢餓に泣いて彷徨した。特攻隊は追いつめられた無残な名誉を負って基地を飛び起った。殆んど効果のない出撃に、若い命を散らして、青年学徒の多数が帰って来なかった。国士の一部外敵の軍靴に祖国を踏みにじられ、光輝ある歴史は傷つけられ、幾百万の同胞は異国に屍を晒らし、今尚国内に敗北の傷あとを癒し終えていないのに、何の栄誉を歓喜して、勲章を授受しているのだろうか。

もう明治や、大正の遺物に多くの期待はかけられない。早く消え去るべきだと、先日或る青年層のグループが極論した。青年の自覚による日本建設のみが考えられると言う。それに異論はない。

将来の国家は如何に歩むべきか。ころんだ後の杖の問題は、明治も、大正も、昭和も共に真剣に考えねばなるまい。ころばぬ先に杖はいる。ころんだ後にこそ一層強い杖がいるのではないか。

軍艦や、飛行機を造るよりも、先づ失なわれかけた日本の精神を振り戻す。日本人を作る教育が、先決問題であろう。如何に優秀な兵器を造り、如何に卓越した兵器操縦の技術を訓練しても、日本人が真の日本人たる精神を持っていなければ、祖国は防衛されない。祖国を守り、繁栄に導くもの、それは優秀兵器と技術ではなく、日本の精神を育てることにある。

それが祖国を防護する威力ある全兵である。兵器以上の兵器がここにある。兵器によって防衛する時は過ぎた。祖国の防衛は確固たる日本精神の復興によってのみ、果されるであろう。

海外に散って帰らなかった幾百万の英霊が、ころんだ後の杖を御えている。孤島の生活十餘日、祖国の興亡を賭けて乾坤一擲の大海戦を戦った英霊が、声なき声を老骨に託びかけている。

×

日本人を育成する教育、これがころんだ後の杖を与えてくれる。この杖は青年がしっかりと持たねばならない。青年教育の核心は、祖国の防衛にも通ずる。産業経済の発展、文化の向上政治の浄化、

×

×

大島七夕祭

八月七日午後七時、大島中津宮の末社織女社に祭場が設けられ、一月遅れの七夕祭が村民多数参列のもとに厳かにとり行われた。

夕闇が漸くせまる頃、雪洞に映し出された社前に三々伍々と参拝する若者男女、それぞれの願いをこめて捧げる千代紙細工や短冊を祭場に設けられた笹竹に結ぶ姿は、恐らくこの大島でなくては見られない情景であろう。

この末社は、中津宮正面参道に沿った小流「天の川」を挟んで東側に牽牛、西側に織女の両社が相対して祭られており、これに対して昔から七夕祭を行っているものである。両社には往古から特別の信仰があり、今でも縁結びや芸事の祈願がこめられている。

先に七月二十三日、厳重な予選を通過した郡内の小中学生六六五名によって七夕揃唱会が行われたのも、この牽牛織女社のいわれに因んでの行事であった。

筑前国続風土記の大島の条に、――筑前国大島と云所に星宮と云有。川を隔て宮有。北をば彦星宮と云。南をば七夕宮と云也。男を申者は彦星の宮に籠り、女を申者は七夕の宮に籠る也。七月二日より七日迄籠りて、川中三重の柵を結て星祭をして、三の手洗に水を入て影を見るに、何れも逢べき男の姿、手洗にうつれば、其男に逢べきと知也。

古今楽雑抄に曰、筑前国大島に星の宮とて、北は彦星を祝い、南は織女を祭る。二社の間に川有。天の川と名付く。女を得んと思へば織女の宮に籠り、男を得んと思へば彦星の宮に籠る。七月朔日の夜より七日の夜半に至り、河中に柵を結て、手洗上中下三つに水を入れて、上中下に男の名を書て祭をして、手洗にうつりたるに随いて、其男女の縁を定る也。此祭をせんとては、河原にたゝぬ日はなしと見える。古くから中央の有識者に知られた存在であることが知られる。古今集秋部の歌に

秋風の吹に日より久方の
天の河原にたゝぬ日はなし

とあるのが丁度この記載に当てはまる。

さて、漸く暮色の濃くなり、夜風もやや涼しさを感じる頃、参拝者も境内に流れるばかりとなったよいよ名物の「七夕踊」の始まりである。島のショウモンさん（娘さん）らによって大きな輪がつくられ、賑やかに踊りが始まった。これは青年団の主催で、今年は男子団員も加わった。社前に習字や裁縫などの祈願をこめた千代紙や短冊が爽やかにゆらぐ。色とりどりの浴衣が花の様に美しい。この夏の夜の圧巻を見んものと集った観光客から喝采の声が聞かれた。

阿蒙少言

残暑の折とは云え、漫談一束置いて逃げようとするのではない。或る家庭風景紹介。娘「お父さんが独りぼっちになったらかわいそうだから、私のお嫁にゆく時一しよについてゆくワ」父「俺をつれてゆくのではなかろう、俺の恩給をつれてゆくのだろう」「お父さんはエチケットを知らない、何でもほんとうのことを、そのまゝ言う悪い癖がある」次は息子「お母さん先輩帰ったか」母「先輩とは誰？」「下宿人の先輩お父さんだヨ」「下宿人の先輩たるお父さんのはいている靴が、千九百円で息子の靴が三千円、下宿屋の主婦たるお母さんにこれを訂正するの要もの。笑って都合の悪いのは、裁判長の判決言渡の場合と、碁式の弔詞を読む場合、その他は笑って差支えはなかろう。男振りもさがりはしない。人生大いに笑うべし。但し皮下につけたような憂傑笑いや、矢鱈におじきをして笑うのは少々嫌味な風景、人間の感情を豊かにやわらかにする程度の、ほどよくの笑いを歓迎。○日曜の朝頃根の外に声あり「あんたも亭子か」一茶を刈る手をやめて顔を上げると、声の主は箒子の誤長どん。日曜の家庭サービスは箒子だけがやるもの如く聞える「ノーノーそらは亭主関白の位なれど、腹へらしの運動だ」○フールカウントだ、何を投げるべきか、打つか打たぬか、瞬間に決すべき対決の一法。野球だけでない、男子の処世まさに一瞬の決断を迫られる場合が多くない。（白雲）

第五十三回　宗像大社献詠歌会詠草

八月八日　於社務所詠草到着順

村山田　吉田佐一郎
きらきらと光る若葉を掃かせて窓べにそよ風心よし
名残り　竹原　円
耕耘機の音より止みし水田より夕べはげしく蛙なくなり
〃　香椎　織田　像雨
人世をかくも生きづらいくそばく苦字の山路たどり来しみに　（彼旧）
宮田　北原きみ子
さいはての初便りに弟は父母の安否をひたに問ひをり
東郷　藤崎　辰子
袋こそ大いなる口梯一つ眼の前で落つ雨長々し
筑邦　津留崎初子
旅を共に相知りてよりふたせの恙の君と良くいますぬ（藤崎様へ）
吉留　山下しづえ
遅かりし梅雨のありを待ちかねて夏を命の蝉鳴きたつる
吉田　古部　由久
兄の来て星は森林都市に阻まれ思ひ出の山谷変貌せしとふ
江口　辻野　開造
ゆあみしてさ風さそふ楼によりしらべ豊かなステレオをきく
香椎　桜井　ツ子
長雨に濡れてそよげり葉の上にむらさき桔梗露はこぼれて
東郷　有吉　春子
幾年を田植えせざれば危ふみて姉は担ぐを苗取りに出づ
勝浦　永島　計七
ラジオ体操に集う子供の頭数だけの高さが出席簿もつ
福間　瓜生　朝恵
手作りの梅の実なれば不味くとも香などで蜜添へて喰む
戸畑　山磨　昌子
筆不精なる夫との便りつけにと思いたる母の電話の声す
吉武　立石　昇
南国ゆ移し植えたるハマユウは五月雨のけぶる田なかに六十路越す睦ぬる妻を病臥に思ふ
福岡　高橋　昇
思ひ残す所なしと云ふ九十翁御代の行末信じ切れるか
遠賀　長畑　房江
汽車ゆけばはげしく揺るる草葦に虫は真昼を鳴きしきるなり
大濠　江崎　琴子
さわやかのそこはかとなく聞こえ来ぬ人も出づらし梅天の晴れまに（梅天の晴間を詠める）
遠賀　藤崎保五郎
五月雨のけぶる田なかに六十路越す睦ぬる妻を病臥に思ふ
福岡　高橋　昇
南国ゆ移し植えたるハマユウは五月を経て花をつけたり
〃　立石ろせの
逢ふ度に母に似て来し姪の面若く遊ばし妹を想ふ
原町　中村　幸
青年のたくましき手は荒れに荒れ職人としての修業つみをり

福岡交通センター落成式

―九州の表玄関にバスターミナル―

地鎮祭　昭和三十九年八月八日
立柱式　〃　〃　十一月二十日
上棟式　昭和四十年五月八日
開通式　〃　七月三十一日
落成式　〃　八月七日

満一カ年の月日を費して建てられた福岡交通センター落成式は、八月七日午前十時同センター三階祭場において斎行された。正面祭壇と大書された宗像三神の木札が奉安され、祭典は久保宮司以下三名の祭員、参列者楠根社長外百余名の敬虔な祈りの中に執り行なわれた。

「此度かくも清く美しく造り量一奉らくと」斎主の祝詞が奏上され、ついで玉串拝礼に移り、一同は次々と玉串を捧げ、工事の無事完成を感謝し、今後の交通安全、業務繁栄と大書された宗像三神の木札が奉安され、祭典は久保宮司以下三名の祭員、参列者楠根社長外百余名の敬虔な祈りの中に執り行なわれた。

「此度かくも清く美しく造り量一奉らくと」斎主の祝詞が奏上され、ついで玉串拝礼に移り、一同は次々と玉串を捧げ、工事の無事完成を感謝し、今後の交通安全、業務繁栄と大書された宗像三神の木札が奉安され、祭典は久保宮司以下三名の祭員、参列者楠根社長外百余名の敬虔な祈りの中に執り行なわれた。

へたるに依りて、今日を生日の足一れる。この間も数十台のバスがこへたるに依りて、今日を生日の足一れる。この間も数十台のバスがこ日と操び定めて事の由告祭り謝びの建物の中で発着しているが、この祭場の一角だけは喉一つない異様なまでの静寂をたもっている。玉串拝礼が終ると祭員が退場した。これから社長挨拶、工事経過の説明がある。この後喜びに満ちた顔が一堂に会して直会が行なわれた。

抑てこの交通センターは国鉄博多駅の左隣に建てられた四階建のビルで、地上一、二階には一日に約五千台のバスが発着し、各方面のバス路線と相互に連絡して、凡そ七万人の乗降客にサービスする職員によって皇霊殿遥拝式が行なわれる。この日は秋の彼岸の中日にあたっており、盆祭とあわせてわが国で三度の祖霊をまつる大事な機会になっている。

今月の交通訓

○誓いも新たに

安全運転

ながつきのまつり

一日　風鎮祭　午前十時

かぜしずめのまつり、稲の結実前の大事な時期に、台風其の他悪天候等の災害を被らないように神の加護を祈願する祭。

十五日　月次祭　午前十時

廿一日　宮地嶽神社秋祭
旧暦社宮地嶽神社の秋季大祭、本宮より職員が献幣する。

廿四日　秋分祭　午前十時

春の春分祭に対してこの時期に行なわれる。本宮では宮司以下の職員店の店頭には、年間の戦果を誇示するかのように大物の魚拓が貼り出される。悲喜こもごもの人の世のあれこれが一枚一枚の魚拓に托されているようで、興趣が尽きない。（写真は堤防の磯釣）

宗像大社宝物館
宝物を訪ねて

阿弥陀経石

当大社所有重要文化財阿弥陀経石は、正面に阿弥陀如来の坐像を陰刻し、その上に六字の名号（南無阿弥陀仏）を横に、更にその上に弥陀の四十八願文の全文と、終りに往生浄土咒を刻してある。

この経石の書体並に形の上にも宋時代の建築様式を模し、更に正面に刻まれている「大宋□□六年」の刻落している二字の下の一字が、無の字と読まれ、南宋の光宗の紹熙六年、日本の建久八年頃（約七〇年前）と見られるという。

又この伝来は、治承年中、内府平重盛公が興入道を宋国、育王山に遣し、福寺料として金三千両を寄附せられた平家物語第三金渡の条に見える。これに対し、建久年中に内府追善の為に宋国から蔵経及経石を船に載て、宋像江口に着船した。時に平民既に亡く、受くべき人もなく、民国に託し、以来宗像大社の保持することゝなったものと伝えられる。

また経石の右側面には平成名で次のように追添刻されてある。

（遠々）（霊）
「右ころさは（等）をんくのり（甲）
やうとうの　こしようを　とふら
（奉）（先）
ひたてまつる　さきのみやつかさ
氏実）（宮司）
うちさね　こんたいくうしうち
（氏）
□□　うち□　いう
（氏）（母）（主氏）
なのうちは　わううち　わうし
（往生）
極　楽）（急）
やうこくらくのためなり　かねて
（服　氏）（現世安穏）
は　ちようちう　けんせあんをん
（後　生　善　処）（子々孫々）
ごしやうぜんしょ　しそえんく
最後に承久二年（庚辰）二月十二日ちうちうのうち在判むなかたの在判」とある。

又左側面には上方に寛喜三辛卯の年号と、下方に久宮司朝臣氏国（在判）の刻文も見え、年代的に見てもこれ等の関係が首肯される。

宗話談話室　釣り談義

釣師は概して気が短い。よく自には釣風景ほど悠長に見えるものはないが、どうしてさにあらず、釣師の心緒乱れて麻の如し云々の止め方など）までの経験と知識の針を水中に垂らしてさえおけば釣れるというものではないらい。

「余り釣れないので頼にさわって水を掻き廻して来た」

「もう決して魚釣りをやらんと覚悟をきめて、竿をへし折って帰って来た」

この短気な人等が大抵魚釣りを続けている。さて、上下貴賤の別なく愛好されている魚釣には沢山の必須条件がある。

季節、その日の時間、朝の満干天候、餌の種類、道具の仕掛、ポイントの選定、釣り方（道具の操法）、タナ（魚群の深度）、要すれば舟の操法（竿、櫓、櫂、舟が多い。魚釣は単に餌をつけ

坊主（釣果ゼロ）になった人が

難しい。

釣師は自然を相手にしているので、釣っている間は孤独になる。

釣師は、釣りをし乍ら何時も何かを考えている。放心できれば幸なのだが、それが出来ない。浮世の雑事からすべて開放されてそやかろうと、第三者は見がちだが、決してそうではない。一個の人間が釣り場に立っている姿には、時として浮世の重荷を払い切れない者の影さえ看取されることもあるかもしれないが、あの、魚果とはならないという不文律は今でも守られている。

今の若い人の釣道はレジャー化してしまって嘆かわしい。道具や服装の華美、マナーのさしさがそれを語っている。昔の釣師は専用のぼろ服に手脚れの一竿で本当の釣りのイカも当りすることがあった。

かくて魚釣りは、自由になりたいる為の「孤独との戦い」となる。しかし、これは一面の見方であって、魚釣りには、釣らない人に厳しい。魚を取り込む迄に、一寸の無駄法螺などは聞いてさえ面白い。逃がした魚の大きかったこと、大物の目慢など、髭を生やしたい年配者の顔

ることがあるかも知れない。難しい条件の下で大物などを取り込んで、ほっとした時の一服などとはいえない。

釣り談義は大抵他愛も無い。罪

社務日誌抄

七月廿一日　剣道部暑中稽古開始
廿三日　大神神社杉岡祢宜神社視察の為来社。中津宮七夕揮毫会開催される。
廿六日　出光宝物館長外三名来社
廿七日　久保宮司、楠本権祢宜外二名沼津宮現地祭奉仕。同行宇都宮祢宜、県庁職員らと共に沖ノ島領地二事現地調査。
廿九日　剣道部暑中稽古終了、司太田権祢宜出向。宗像警察署古賀署長以下柔剣道部員、県下対抗試合必勝祈願祭を行う。（優勝した）
三〇日　宗像海運小林取締役来社
三一日　地元総代茅輪作製奉仕

八月一日　夏季大祭第一日、午前八時高宮祭、午前十時総社祭斎行宮司以下全員奉仕。参拝者多し
二日　夏季大祭第二日目、午前十時総社祭斎行。
七日　福岡交通センター竣工式
九日　沖津宮奉仕の為、久保宮司太田権祢宜出向。宗像警察署古賀署長以下柔剣道部員、県下対署
十日　出光興産福岡支店新旧庶務課長小野氏、最大氏挨拶の為来社。
十二日　出光石油化学取締役大和丈夫氏外二名特別参拝。
十七日　妻平家同門会員、九州二十六日献茶式行合せの為来社。
廿一日　沖津宮奉仕向中の久保宮司太田権祢宜奉仕終了。

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番

宗像宮（三）

九州の豪族宗像氏は、そのかみの例のまにまに祭政両面を掌握して来た。ついで天武朝には宗像徳善の女、尼子娘（あまこのいらつめ）はその後宮に入って、後の太政大臣高市皇子を生みまつった。

奈良時代には大領宗像朝臣深津に皇親竹生王が降嫁せられていることが続日本紀神護景雲元年の条に見える。

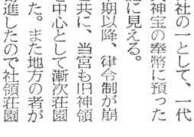
平安時代に神階が制定せられや、藤原純友の乱平定後に宗像三神は正一位勲一等に昇叙せられと頻従符宣抄に見える。延喜の制には宗像神社三座とも二名神大一に班し、国幣の大社に列せられた。このように古くから西海道の代表的神社の一として、一代一度の大神宝の奉納に預つた左経記に見える。

平安中期以降、律令制が崩壊すると共に、当宮も旧神領の神戸を中心として漸次荘園化を図った。また地方の者が私領を寄進したので荘園荘園が増大し、鎌倉時代には筑前、肥前、壱岐、豊前にわたる六十数ケ所を有した。

平安末期には神領をあげて皇室直轄御領としたりいわゆる八条院領の一つとなって伝領せられた分が五三八町五段であったと伝えられる。かくて建武中興に至るのである。

これより先、源頼朝が鎌倉に幕府を開き、封建の支配体制を樹立すると、宗像氏は御家人の列に加わって武家構成の一員となった。かくて大宮司は武家的影を濃厚にし、その補任も、本所を皇室とする幕府の御教書をまって、それに基いて任命されたのであった。

鎌倉末期には武家幕府の直領としても領されたが、建武中興によってこのことは停廃せられた。南北朝の動乱期には宗像氏は北



党に属している。やがて室町時代にはその地理的環境を活用して朝鮮との貿易に進出し、応永から永正年間の約百年間にわたってそれを営んだ。享徳三年申秋の日付を以て宗像朝臣氏が朝鮮王に国書を致しているのでもそれがわかる。

× ×

大宮司家は宗像宮の祀官兼神領管掌者として、古来よりその権勢を保持して来た。祀官としての初見は古事記、日本書紀に

・此の三柱の神は胸形君らが以ちいつく三前の大神なり（記）
・此れ則ち筑紫の胸肩君らがいつき祭る神是れなり（紀）

とあり、これらが或いは神裔としてか九州北辺の豪族としてその威勢を振ったものであろうか。

宗像宮の由緒に於て見えるもう一つに、前代に於て伊勢大神宮に次ぐ国家朝廷の庇護を受け、社務職また古典に見える宮人豪族であった。これが降って平安時代の醍醐天皇延喜十四年には、皇弟源親王は占部、大和、吉田、高向の四家を従えて宗像に西下せしめられたと伝えられる。爾来、当代の氏貞に至る迄六百余年間、連綿して奉仕が続けられている。

大宮司家の眷族は百八十姓にも及び、宗像宮と大宮司家を中心とする結束は固い。時に大宮司家の相続争い等により紛乱することもあったが、神領を保全する為の動きというものは他にその例を見ない程であった。

大よその事績を見ると、

○天慶四年には第二代の氏男は黒崎に於て藤原純友、純素を征伐

○文治元年、三十五代氏実は壇浦にがで武功をあげた。

○文永十一年、四十八代長氏は、元寇に際して思慈をあわす。

○弘安四年、同じく長氏は元寇に際して博多湾に於て戦った。

○元弘三年、五十代氏長は北条英時を退治。

○建武元年、同じく氏長は北条高政を筑前帆柱城に於て追討。

○建武三年、同じく氏長は、嫡男民部大輔氏正、次男三郎氏俊ならびに家臣の許斐、石松、占部大和、吉田らの勢と共に多々良川に於て菊池武冬将兵右馬助以下を討ち取る。

○正平十四年、五十二代氏俊は菊池肥後守武光に宿内白山城を攻められて、これを没襲した。氏俊の嗣、朝鮮と貿易をした。

○文中元年、五十二代氏名は官軍に属し、垂見合戦に於て戦死。

○文中三年、五十四代氏（五十二代同人）は小弐氏討の軍旅を征伐。

○大授元年、同氏俊は小弐忠資を退治。

○応永三年、六十代氏経は大内義弘にくみし、菊池、小弐を攻略、八月肥後の人代に攻め入った。

○享徳三年、六十七代氏正は朝鮮国王に使節を派遣した。

○文明元年、六十八代氏郷は、小弐資頼、教頼父子を破る。

○文明中、七十代氏定は十年間にわたって叔父六角高頼と道と共に小弐の侵攻を防いだ。

○文明十八年、七十代氏貞は、小弐政資を大内義興と共に長州に進撃している。

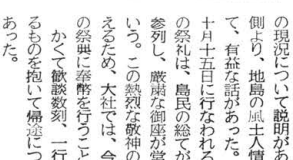
○天文十年、七十六代正氏（隆尚）は尚弟の氏続と共に大友義鑑竜造隆信らの筑前侵攻を防戦。この時に許斐城の許斐安芸守氏綱が善戦した。（つづく）

地ノ島懇談会

七月二十一日、郡内地島に於て大島神社の参拝を行った。この御社職員と地元氏子との懇談会が催された。これはかねて氏子区内にあって地島が交通の便等で宗角大社の現状について理解を得る機会が少ないのを懸念して催されたものである。

当日は、神社側より久保宮司外三名、又鐘崎、権田評議員、上八、吉武評議員が赴いた一行は泊港で地元の深田町議の出迎えをうけ、鎮守

像三女神を奉斎してある。拝殿に掲げてある奉納額を見ても島民の一行は泊港で地元信仰のなみなみならぬものが窺え



（写真は地ノ島の鎮守厳島神社）

て、心強く思われた。

ついで深田町議宅で懇談会にうつる。先づ、久保宮司より、神社の現況について説明があり、地元側より、地島の風土人情等について、有益な話があった。なかでも十月十五日に行なわれる厳島神社の祭礼は、島民の総てが羽織袴で参列し、厳粛な御座が営まれるという。この熱烈な敬神の念にこたえるため、大社では、今年よりこの祭典に奉幣を行うことにした。

かくて歓談数刻、二行は心暖まるものを抱いて帰途についたのであった。

新道路交通法施行さる

――九月一日より――

この改正案は、去る六月一日法律第九十六号を以て、公布され、三カ月を経過した二の九月一日から、施行されることになった。これには免許種別の改正、車種の統一、安全運転管理者の選任義務などが含まれ、国道路案約への加盟による国際級免許制度への飛躍が改正の根本眼目ということである。

以下は、その改正内容である。

(1)自動二輪車（これまでの自動二輪車、軽自動二輪車、第二種原動機付自転車）の運転者は、政令で定める道路（当分の間は高速自動車国道と、自動車専用道路）の区間においては、乗用ヘルメットをかぶらない者を乗車させて、自動二輪の自動車を運転してはならないこと、高速自動車国道および、自動車専用道路で、自動二輪車に運転者以外の者を乗車させて、運転してはならない。

(ロ)総理府令で定める台数以上の自動車を使用する者（道路運法の規定による自動車運送業者、および運輸業法の規定による通運事業者を除く）は、自動車の安全な運転に必要な業務を備えた者のうちから「安全運転管理者」を選任しなければならない。またこれに伴う必要な監督規定を設ける。

管理者を選任すべき、自動車の使用者の使用自動車台数は、三輪および四輪の自動車については十台を、二輪のみを使用する場合、二輪の自動車を比較的多数使用している場合は、十台をこえる台数を定める予定になっている。

また、安全運転管理者の要件は、年令二十才以上、自動車の運転の管理の実務を二年以上経験した者。その他、道交法の無免許運転、酒酔い運転などの罪を犯し、罰金刑以上の罪に処せられ、一定の期間を経過していない者でないことなどとなっている。

(ハ)（前略）最近における自動車等の性能の向上に伴い、自動車の大きさなどによる運転方法の難易についても普通車と軽自動車の間にその差が少なくなってきており、この際、運転免許の種類と当該運転免許によって運転することができる自動車などの種類に関する規定を整備し、自動三輪車、軽自動車、および第二種原動機付自転車に対する運転免許試験を強化すること。（中略）

(イ)四輪の自動車（大型、普通、大型特殊車引）と三輪の自動車（自動三輪）を一本化し、これに対応する運転免許を「大型自動車免許」および「普通自動車免許」の二種類とする。但し軽三、四輪については三年後に実施。

(ロ)二輪の自動車（自動二輪、軽自動二輪、原付二種）を一本化し、これに対応する運転免許を「自動二輪車免許」とする。第一種原付の免許は「原動機付自転車免許」と名称を改める。

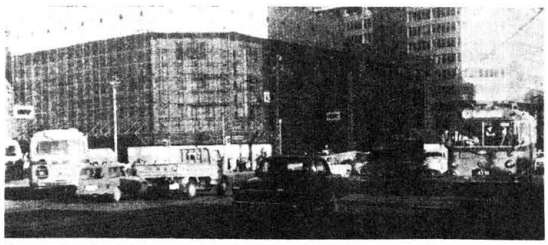
(ハ)新たに設けられる牽引免許、および、牽引第二種免許は一定重量（七五〇㌔）をこえる被牽引車を牽引する場合は、大型特殊自動車免許の対象から除外し、新たに牽引免許の対象とする。

なお、普通自動車の運転年令を十八才以上とする。その他、道路交通法の違反事項の追加、講習規定、身体障害者の「車いす」の通行区分などについて、関係規定が整備されている。

最近における道路交通の実情と激増する交通事故を防止するためにとられたこれらの措置により、飽くなき円滑な安全交通がすすめられることを願ってやまない。

（写真は難路する福岡市内）

× ×



〝ありがとう〟

――沖津宮遙拝所清掃――

夏は若人を海へ山へとさそう。この夏も、ここ大島には、リュックを背にしたキャンパー達が、海を渡って多勢やって来た。海辺に、テントを張り、海に泳ぎ、磯に遊んで夏を楽しみ、青春の想い出を胸に抱いて島を去った。健康的な微笑ましい光景である。然し、その去った跡は、幻滅であった。至る所に空缶はころがり、紙屑は散乱し、甚だしきは、共用の井戸に瓶を投げ込み、便所の板は、はずして燃料にしてしまう等、狼藉の限りを尽す輩もあったのである。

殊に岩瀬の沖津宮遙拝所前の広場は、犇地なるが故に、心なきキャンパー達の無軌道、乱雑な所業にお参りすると、大抵、紙屑や、空缶がちらばっていて、腹立たしい思いがするのですが、今朝に限ってきれいに掃除されているので、びっくりしました。ふと見ると、一人の青年が、黙々と空缶を拾い、紙屑を集めて片付けている光景でした。

「今日は大変気持の良い朝を迎えました。いつも朝起きて遙拝所にお参りすると、大抵、紙屑や、空缶がちらばっていて、腹立たしい思いがするのですが、今朝に限ってきれいに掃除されているので、びっくりしました。ふと見ると、一人の青年が、黙々と空缶を拾い、紙屑を集めて片付けている光景でした。」

その真摯氏が或る朝沖津宮社務所になくてはならない存在なのであった。

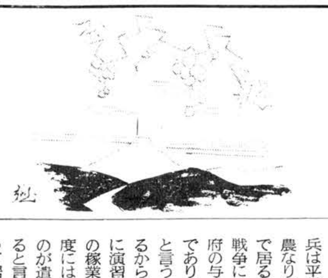
「今日は大変気持の良い朝を迎えました。いつも朝起きて遙拝所にお参りすると、大抵、紙屑や、空缶がちらばっていて、腹立たしい思いがするのですが、今朝に限ってきれいに掃除されているので、びっくりしました。ふと見ると、一人の青年が、黙々と空缶を拾い、紙屑を集めて片付けている光景でした。」晴々とした顔をはにかませて去って行った。

むかしから「旅の恥はかきすて」という、あまり香しからぬ俚諺があり、そしてこの放縦な享楽精神は今尚、いやより一層顕著をきかして横行の感がある。秀峰富士は屑山となり、信州の最勝、上高地は観光地となる嘆わしい昨今であるが、「立つ鳥跡を濁さず」という言葉もあるのに、何時しか日本人は、鳥に見習う心のゆとりを失ってしまったのであろうか。

近年、「小さな親切」なる運動が提唱され、各地に善意銀行が設置されて、この運動は次第に社会に拡がりつつある。この懇意になって、一人一人が、自らの両手を「小さなホウキ」にかえて、身の周りの美化に心掛けるならば、再び、ふるさとの野山は自然の美しさを取り戻し、人々の目を楽しませ、その心を和ませてくれるであろう。

「当り前のことをしただけです」と言葉少なに語り、その日も

宗像大社献詠 俳句作品集 (三十三)



津屋崎　西住喜三郎
外燈の下の夜濯ぎ一日終ゆ

〃　安部真佐子
あげ底の菓子開け睡蓮闇に浮く

〃　毛利　夜潮
万緑や寒の地獄の噴くことよ

〃　白石百合蔵
療棚を隔て砂浜そこも灼け

〃　井浦　良介
鰯雲炭坑振り返る移転の荷

〃　久羽　文王
朝涼の声揺すぶってぼら走る

〃　溢田しげを
遠く漁火肩を寄せ合い歌うたう

〃　香立喜一郎
ニッカズボンに露貰い来し草の路

〃　勝田　光一
少女容れ朝露の森乳色に

〃　浜津　鴻浪
胸の奥翳りしままの晩夏たり

〃　吉野　享志
妻の座の人を慕いし月見草

東郷　小野　花居
新涼の朝月丸く風渡る

〃　小野　淡坡
午砲古り明治も古りて秋は立つ

厚狭　篠田　南洞
鬱として青田語らず水沸ける

日立と共に五十年 (六)

倉田主税会長の半生記

銅線の仕事をはじめたのが大正六年、彼の二十九才の時であり、特殊絶縁電線製造設備が完成したのが実に昭和十年である。この時彼はすでに四十七才になっていた。一口に〃電線づくり〃というが、二十年近いあいだ只一筋に電線と取り組み、その研究に没頭し、その試作、実験に精魂を枯らすということは、尋常一様の人間のなし得ることではない。途中で倦きるのが普通である。倦きないまでも、少し地位が上って係長などの肩書がつくと、大概の人間は自分からは手を下さず、専ら人まかせになるのがあたりまえなのだ。所が、彼は徹頭徹尾自分が先頭に立ってやらなければ気が済まないのである。人を信じないのではない。人を信じると同時に、彼は自己を信じるのである。簡単に言えば、自信が強いのだ。同時に責任感も滅法強い。といって自信が強いのと〃うぬぼれ〃とは全く異る。

彼は生まれと育ちの良さからたしかに自尊心は高い。必要以上に自らを卑めることは耐えられない人間である。然しうぬぼれ男になる程、彼は無思慮ではないのだ。身の程知らずにうぬぼれるのは馬鹿な人間のやることである。彼は部下に対して、仕事の面で厳しいことで定評があったが、自分自身に対しては、もっと厳しかったのである。自分は何もしないで、人ばかり責めるのではない。自分は常にベストを尽して努力するから人がいい加減なことでお茶を濁すのを看過することが出来ないのだ。彼の小言は有名である。

現在日立電線株式会社の電線工場で副工場長をしている山野井勝一郎は桐生高工を卒業して、日立に入社以来、主税が軍納部長として本社に転勤する迄、終始彼の下で指導を受けた人であるが、若い頃は一日として〃倉田さんに叱られない日はなかった〃といって述懐する。それくらい主税は部下を訓練し、鍛えたのである。あまりやかましく言われるので、たまに言われない日があると、なんとなく調子が狂って落着かないらしい。そんな時、彼は主税のところへ行って、〃今日はお小言をいただくことはありませんか〃と伺いを立てたという。皮肉の言える人ではないから、本気でそうたずねたのであろう。これにはさすがの主税も少々びっくりもし　また　若干照れたらしい。ニヤリと笑いながら、〃いずれ小言の種は出てくるにきまっているから仕事をしながら待っていて給え〃と答えたという。そう言われて〃やっと気分が落着いた〃というのだから、小言を言う主税も、言われる山野井も、すっかりそれが身についた日常行事になっていたのであろう。然し、主税の小言は単に叱るための小言ではなかった。腹が立って怒鳴りつける心なしの罵声ではなかった。それは相手に対する親切であり、愛の鞭であったのだ。なんとかして相手を向上させてやろうという、先輩としての、上司としての思いやりが、ときに激しい言葉となるのであった。だから或る時、山野井が主税と一緒に東京の本社へ出掛けた時、汽車の中で向い合っていると、主税のほうから、しみじみ話したことがあるのだ。

「どうだい山野井君、僕みたいにガミガミ言う上役はいないだろう」「そんなことはありません」「お世辞を言うな」「僕はこれでも野州男子です。お世辞や、おべっかは生まれてから一度も言ったことはありません」「そんなに怒るものじゃない、山野井君、僕は道楽で叱るのじゃない。僕に叱られているあいだは安心してよろしいのだ。」「……?」「見込があると思えばこそ、叱りもする。怒りつけもする。しかしなア、山野井君」「はア……」「こいつは駄目だと見切りをつけたら、僕はもう絶対に小言は言わない。わかるかね」「はア、わかるような気がします。」「僕はムダなことはしたくないのだ。小言を言ってムダになる相手には一切言わない、言いたくない。」「わかりました。」「わかったら安心して叱られ給え」「ありがとうございます。」「礼を言うやつがあるかい、アハハ……」主税は愉快そうに大きく笑った。山野井は絶縁製造について、主税のために大いに尽すところがあったのだ。

在郷軍人会とともに、忙がしい勤務のかたわら、彼が尽したのは消防隊の仕事である。日立製作所が大正八年、大火災のため、工場の大半を焼失したとき、主税はまだ消防隊員にはなっていなかった。しかも東京出張の不在中のことであった。主税は焼跡に立ち、工場の安全をはかるには、平生から消防設備を充実させることが必要であることを痛感した。特に優秀な隊員を養成しなければならないと思ったのである。まもなく消防隊を強化することになった。そして、彼は選ばれて日立工場消防隊の一員となった。一員と言ってもただの隊員ではなく、第二組の組長である。すでに職員としては技師であり、銅線係長である。電線製造については最高責任者なのである。その彼が消防隊に入るというのだから消防隊の人達も少々驚いた。同時に、彼の真剣な組長ぶりに感心したのである。消防隊は、常に〃いざ出動〃にそなえて訓練を怠らなかった。炎熱の真夏にも、酷寒の真冬でも、一切おかまいなしに消火作業の練習を行った。夏はまだしも、寒い冬には大変な苦労であったが、彼は工場では勿論、自宅にあっても、何時の場合にも制服に身を固め、組長として、先頭に立ってかけ回った。軍隊調のキビキビした言動で隊員たちを励ましたり、注意を与えたりしたのである。そんなときの彼は、工場で仕事をしている時と全く同じで、大きな声で怒鳴りつけることも珍らしくなかった。「隊員は工場の安全について責任がある。一人一人が責任を自覚しなければ、消防隊が全能力を発揮することはむづかしい。義理や役目でいい加減なことをしているのでは、本当の隊員ということは出来ないのだ。」こう考えるので、主税は徹底的に隊員を指導したのである。

昭和四年に日立工場第二消防隊長となり、更に九年には日立工場連合消防隊長の重任を負うことになった。その頃、日立には創業以来の山手工場のほか、海岸寄りに一大新工場が出来ており、これを海岸工場と呼んでいた。従って、連合消防隊長というのは全工場の各消防隊を統合指揮する最高の責任者なのである。彼は昭和十三年に新設の軍納部長として東京の本社へ転ずるまで、終始連合消防隊長として、職責を完遂したのであるが、彼の在職中、日立工場消防隊は茨城県下に於ける模範消防隊といわれ、県知事から表彰されたこともあった。(文責賽父守)

あゝ常陸丸 (十四)

其の方法は町や村と言う所へ行って見ると必ず射撃会が組織してあって平素射撃を研究して居ります故に射撃術に於ては同国の人民は世界で有名です、欧州強国の独逸や仏国の者にも負けませんそれで一旦事ある時は悉く出で、国の防禦に当るのであります。であるから此の国の兵は平常は皆な自分の家に居て農なり商なり将た工なりを営んで居る、而して事あれば直ちに戦争に出るのでありますから政府の与ふるものは武器と馬だけであります。処で軍事的の訓練と言うことも亦極めて必要であるから演習も致します併し一度に演習をする時は農なり工なりの稼業の妨害に成りますから一度には致しません。今年甲のものが遣れば来年は乙のものが遣ると言う様な順番に交代して遣って居ります。唯だ常置してあるのは徴兵事務官の如きものと僅かの幹部丈けであります…。

我が日本の男子は悉く兵である訳でありますが其の実は法律や何かの上で種々なる免除があり又現今常備軍の数は人口に比して格別多くもないから名は全国の男子は残らず兵である訳であって其の実際は僅かしか無いことに成って居ります、瑞西が表面は常備兵がない訳で実際に於て全国の男子悉く兵であるのと事実が全く反対して居るのである。

次に仏蘭西は斯うであると言ふに此の国は人口の割合に比して兵士が沢山である。即ち人口は三千八百万余人であって、二十軍団が設けられてあり、一旦有事の日に当っては三百万人の兵を出すことが出来ます。仏国の男子は片輪者に非れば兵役の義務を免ることは出来ません。同国に於て、軍事教育を受ける者は人口百人に対して八人強の比例に成って居ります。是が世界で比較上国民が軍事教育を受くる一番多い国であります。一番少ないのが露西亜で、此の国は人口百人に対して三人許りの割合でありますが、日本の事は確かなる事を知りませんが、露国よりも少なくとも多い事はあるまいと考えます。仏国は近来二年兵役の説が起て居ります。是は現役は従来の三年を減じて二年にすると言うのでございますが、如何にも働き盛りの壮丁が悉く兵役に出ては農工商の妨害に成ると言う説も出そうなことであります。日本では先年、帝国議会へ是と同様の説が出たことがありましたが、成立たずに、仕舞ひました。如何にも仏国の如き人口に比較して多くの兵数を有する国に在ては、二年兵役論も無理のない所であるが、我が日本の人口は四千百餘万人もあるのに、其の兵備は漸く十三師団であります…。日本に於て唱えられし二年兵役説はどう言う訳でありましたか、私には一向其の理由が分らないのであります……。

第二に教育とは人員を教育して軍事上の知識を与うる方法を称するのである。例えば、今回の機動演習の如きも亦結局此の教育に外ならぬのであります。序でに申して置きますが、此の機動演習と言うことは只下級軍人を教育するのだと思う人もあるように聞きましたが、ソーではない。上は将官より、下は兵卒に至るまでが戦争の方法を研究するのである。即ち、将官は一旦事あるとき、己れが提げて出るところの軍隊を指揮運用するの方法を研究し、参謀官は己の参画したる計画が適当でありしや、否やを実地に試み、又隊長は直接に部下を号令して自分の思う通りに動くか如何かを見るのである。又部下の者は其の長官の命令に執て平素己の学びたる軍事上の知識を応用して隊長の意図に合うように進退動作の実験をする者であります。

軍事教育と言うことは近来は非常に高尚の程度に進んで居りますから、僅かの時間で詳しく述ることは六ケ敷のであります。我が国には、軍事教育をする学校が十四五もありますが、其の教育の目的は孰れも戦争をすると言うことだけである。戦争をして国権を失墜しないようにするのが、最大主眼であります。

其の学校の種類を挙げて見ると、先づ始めの所では幼年学校と言うものがある。是は地方、中央の二種に分れて居ります。夫れから士官学校は極初歩の軍事教育を与え、下級の士官を拵らえる所で、又大学校は高等学科を授け、参謀官を出す所であります。此の外に戸山学校是は歩兵の戦術と射撃とソーして体操を教授する所です。

× × ×

〔一頁よりつゞく〕

大井　安部　重郎
三百里離れて聞ける娘の声に孫も交りて片言で話す

〃　安部　静子
水打ては心安まる思ひにて木々の緑も一きは美し

〃　吉田　杏子
我が心満つる思ひや植ゑ終へし青田に立てば風の清しき

宮田　片山　朔子
還る筈もなき夫恋ふる終戦後二十年の重みに耐へ抜きし現在

吉留　白木うめの
一つこと終日思ひて定まらぬまゝに厨に葱きざみをり

戸畑　田中ハツセ
手伝ひの娘等も共にテレビ見つゝ西瓜の皮で頬を摩擦す

田島　小野　迪夫
むなかたの献詠歌会なつかしみ五十二回目を書きしるすなり

勝浦浜　永島　文子
幾世代流れし夏の風物詩元気な男の子の団仏の声

深田　中野　節子
予定外の洗濯物なれどかはきたる手織の布の藍の香にたつ

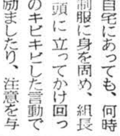
吉武　原田　松代
長雨の晴れて夕月さす庭に月見草の花の白く開きぬ

〃　原田　リノ
きのふは南今日は北より夕立の降りきて稗引く背なを冷すも

東郷　藤田　信子
松原に入りて吾子らのたはむるる姿みどりに染まるかと見ゆ

——宗像藪庵先生百話——

南方　華やかなりし頃



宗像太郎坊

噛み煙草

スマトラ東海岸州の煙草は、デリー煙草と呼ばれ、ハバナ煙草に次ぐ良質のものである。ことに葉巻の一番外側の葉はデリー煙草が最高であるといわれている。この煙草はメダン市を中心として、周囲五〇粁にわたる地域に栽培されている。その起源は一八六四年オランダ人のテンホイスが初めて移植したもので、その後、盛業となり、太平洋戦争前では、デリー煙草会社が最大、十万六千町歩の土地をもっていた。つぎがセネンバ会社で五万二千二百町歩であった。

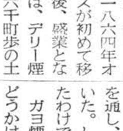
栽培法は七年輪作で、一年、煙草を作ると、次の六年間は休ませる。ところが、オランダ人は、ダッチ・アカウントという言葉があるくらい、なかなか金儲けがうまく狡猾だ。まず、ネシア人から二十一年の契約で土地を借り、その間、そこの地主になり、最初四カ月は煙草を栽培し、つぎの八カ月は小作人にネシア人を使い米を作らせる。ネシア人の習慣として、小作人は、全収穫米の半分を地主に返さねばならない。オランダ人はその米をもらった恰好にして、小作人に二倍の値段で売りつける。だから結局、オランダ人は煙草と米の全収入を自分のふところに入れることになる。

さて、そんなことがあっても、煙草の木が背より高くなり、青い広葉をつぎつぎと付け、その先に、白紫の花が咲くと、オランダ人もネシア人も一個の人間として可憐なその花を愛し、成長を喜ぶのである。いよいよ葉を摘むと、葉柄を竹に通して日ぼしにし、出来あがった葉は積み重ね、三、四日醗酵させて仕上げる。

この仕上った葉はスマトラより直接、方々に輸出するようなことはせず、かならずアムステルダムを通し、米国、その他に輸出していた。しっかりと自国の収入としたわけである。

ガヨ煙草、こんな名前があるかどうかは知らないが、ガヨ族(アチエ州)の作った煙草をかりにこう呼んでおく。コタ・チャネより曲折羊腸のジャングル路を登ること約一〇〇粁で、ブランケジャランという村に達するが、ここも煙草の集積地、各農家では煙草を栽培している。人家の裏に行くと、粗末な倉庫があり、刻んだ煙草を山と積んで、下の方は足で踏み散らかされている。この煙草を俵にし、現地産の小型の馬の背に積んで、猟銃を肩に、猛獣の咆哮する密林の路を何日もかかってコタチャネの町に売りに行くのである。この連中と空家になっている営林署分所で一緒になったことがあるが、焚火を囲んで晩飯を喰っているのを見ると、飯の上に玉葱の小さいみたいなものを切り、生のまま飯にふりかけて、調味品も使わずに、指で喰っている。食後は話しながら何か灰の中からかき出して喰う。そしてわたしにも一つと所望し喰べてみるとなかなか旨い。何かとたずねると、ケミリKemiri(石栗)だという。ガヨ人は煙草の刻み葉を縄によっている。縄煙草である。まっ黒く、濕っぽく、吾吾にはとても辛くて喫えない。(つづく)

我楽苦多告知板



○オートバイを買ったS君とM君が遠乗りに出かけた。宗像から山口県宇部市迄行って来た。常盤公園は美しかったが、二人共「どうもアベックが多くてね」口を揃えて云うので、誰かが「それでどうした」「うん、仕方がないから帰って来たよ」

○先月の此の欄で一寸触れたT君と銀行員Y氏との碁戦が、先日世紀の火ぶたを切った。T君、余りにも勢い込んだため、かえって敵の乗ずる所となり、惨敗を喫した。Y氏「今度は何目か置けよ」T君「いやだ」Y氏「敗けてから何を云うか」T君「クク、クヤシイ!」かくて延々と盤外戦が続いた。

○十五号台風が一過して朝夕が涼しくなった。とたんに元気になった若い人達が「足角力」をはじめた。一番やせたW君が断然強い。口の悪いのが口惜しがって「あいつは肉が無いんだから、骨ばかりなんだから——」

○テレビの「愛染かつら」に女子職員が夢中。スレ違いの場面に「はがゆい!」(じれったい)